

静岡文化芸術大学図書館・情報センターだより

# 新 知 人 故 郷

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2007.9 Vol.10

平成19年9月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター  
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号  
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125  
<http://www.suac.ac.jp/library/>

## Contents

### ■表紙

### 修学院離宮 ————— ①

### ■巻頭言

### 音楽と読書 ————— ②

静岡文化芸術大学 学長  
川勝 平太

### ■図書館散歩

### 本との出会い・その情景 ————— ③

静岡文化芸術大学 デザイン学部  
生産造形学科 学科長  
坂本 鐵司

### ■〈シリーズ〉

図書館・情報センターを使いこなそう!

### 聞蔵(きくぞう)Ⅱ ————— ④

ビジュアル:

朝日新聞全文記事

オンラインデータベース編



### 修学院離宮 後水尾上皇(慶長元年～延宝八年、1596—1680)造営

京都新聞出版センター編「桂離宮 修学院離宮」京都新聞出版センター、2004〔521.825/Ky6〕

江戸時代寛永期の宮廷文化の特質は、王朝文化の総合としての生き方であった。池に浮かべた舟上で和歌を詠み、管弦を奏で、あるいは花を賞で、月に誘うといった風雅な生活態度そのものであった。修学院離宮と桂離宮は同じ寛永文化の所産でありながら、きわめて対照的な趣を持っている。\*修学院離宮は確固とした財政基盤のもとに後水尾院の離宮として造営されたのに對し、「桂離宮は八条宮家という一宮家の別荘で、規模の點で大きな差があった。さらに前者は後水尾院が緻密な計画のもとに全景を構想して完成したのに對し、桂離宮は、三代にわたり前後四十年を超える期間に増築につぐ増築によって現状の姿が生まれ、ほとんどプランなしに結果として優れた遺構が誕生した」。\*\*桂の庭は精緻を極め計算されつくした美が凝縮していて、息づまるような緊迫感さえ感ぜられる。桂の約八倍の面積を持つ修学院は、畦道の続く田園風景が広がり、深山の趣、濱の情景、そして借景となる岩倉、鞍馬、貴船の北山連邦いずれも壮大な庭園と見事に溶け合っている。

下の茶屋、中の茶屋と辿り、上の茶屋からの景觀を作家大佛次郎はこう述べる。「修学院の庭は、帝王の雄大な氣宇を感じさせる。天皇でなければこれだけ自由闊達な庭を考えまいと思われる。この庭は、茶の湯の束縛から離れている。武家の庭の、窮屈なものものしさや、禪寺の象徴的に意味ありげなのを気取ったものでもない。素直に自然を見ようとしている。この庭は結界によって遮られていない。堂々と大きな天に向かい合っている。(略)雲を呼び、雷に命令することも許されそうに大きな空間を支配しているのだ。」\*\*\*

\* 齊藤秀俊、「近世宮廷の文化」、桂/修学院と京都御所、東京、学習研究社、1979。(日本美術全集19)〔708/N77〕

\*\* 熊倉功夫、特集、修学院離宮:後水尾院と修学院離宮、国華、110(12)、1317号、2005。

\*\*\*大佛次郎、「修学院幻想」、終わらない庭、京都、淡交社、2007。〔629.21/O 93〕



静岡文化芸術大学 学長  
川勝平太  
Heita Kawakatsu

文中に登場した図書

スタンダール著 『赤と黒』 (スタンダール全集) 958.68/St4
ヘッセ著 『デミアン』『知と愛』『シッダルタ』 (ヘルマン・ヘッセ全集) 948/H53
ジイド著 『田園交響楽』 (新潮世界文学全集) 908/Sh61
マルティン・デュガル著 『チボー家の人々』 (白水Uブックス) 081/H19
ロマン・ロラン著 『愛と死の戯れ』『ピエールとリュース』 『ジャン・クリストフ』 (ロマン・ロラン全集) 購入手続き中
西田幾多郎著 『善の研究』 『西田幾多郎全集』 121.63/N 81
スピノザ著 『エチカ』 (岩波文庫) 081/Iw1
ゲーテ著 『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』 (ゲーテ全集) 948/G56
吉川英治著 『新・平家物語』 913.6
トルストイ著 『アンナ・カレーニナ』 (トルストイ全集) 988/To47
ベートーヴェン 交響曲第7番 ヴァイオリン協奏曲 弦楽四重奏曲第15番 (ベートーヴェン全集) 762.34/B32
メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 (購入手続き中)
チャイコフスキー ヴァイオリン協奏曲 交響曲第6番「悲愴」 (購入手続き中)
シベリウス ヴァイオリン協奏曲 (購入手続き中)
ブルッフ ヴァイオリン協奏曲 (購入手続き中)
ブラームス 交響曲第3番 交響曲第4番 (購入手続き中)

## 音楽と読書

本に囲まれた生活ながら、心の形成に読書と音楽のどちらの影響が大きかったのか区別が付きません。父方の祖母は明治生まれでしたが、ハイカラにも女学生時代にヴァイオリンを習っており、孫の情操教育に熱心で、ヴァイオリンを習わせました。幼稚園に入る前のことです。小学校時代、ヴァイオリン教室の定期発表会では、楽器は（意に反して）ギーギーと鳴るばかりで、我ながら愛想を尽かしていました。しかし発表会では上手な人の演奏も聴くので、自然に耳が鍛えられて心の中に音楽が蓄積し、祖母の願いは実を結んだように思います。

物心のついた中学生になったある日、市電の停留所に立っていた時に突然、脳のなかでヴァイオリン曲のメロディーが奏でられ続けて、それが何の曲なのか、むしろに確かめたくて、機会あるごとにヴァイオリン曲を聴いているうち、それがメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲の第1楽章の第2主題であるのを知ったとき、心の扉が開いたように思います。それを機に、チャイコフスキー、ベートーヴェン、シベリウス、ブルッフなどヴァイオリン協奏曲を中心にクラシック音楽をむさぼるように聴き込むようになりました。

私は「団塊の世代」に属しますが、私の通った公立中学では同学年に17組、下の学年は16組、上の学年は18組もあり、ひとつの中学に2500名以上もいるマンモス校で、腕白坊主やおてんば娘と仲良くしていました。両親はその奔放ぶりを案じ、男子のみの中高一貫のカトリックの進学校に高校から編入させました。そこには2歳下の秀才の弟が中学から学んでおり、両親は優れた弟の態度行動を見習わせようとしたのです。弟が大好きであった私は、高校では弟の属していたオーケストラ部に入り、クラシック音楽の演奏練習に入れ込む毎日となり、特にベートーヴェンの曲にのめりこみました。高校3年生のときの定期演奏会の演目はベートーヴェンの交響曲第7番で、全身全霊でヴァイオリンを弾き鳴らしたのを覚えています。

その男子校には「ませた友人」がたくさんおり、スタンダール『赤と黒』、ヘッセ『デミアン』『知と愛』『シッダルタ』、ジイド『田園交響楽』、マルティン・デュガル『チボー家の人々』など友人たちと争うように耽読しましたが、中でもロマン・ロランの『愛と死の戯れ』『ピエールとリュース』などは愛読し、『ジャン・クリストフ』には魂をゆすぶられました。そんなある日、名曲喫茶で誰かがリクエストして時たま流れる悲哀に満ちた音楽がすごく気になり、それがベートーヴェン晩年の弦楽四重奏曲第15番であることを知って、驚愕しました。それはジャン・クリストフ的な音楽家像、ロマン・ロランが『ベートーヴェンの生涯』で描いた「苦悩を突き抜けて歓喜へ」というベートーヴェン像を粉微塵に打ち砕くものだったからです。

なぜこのような悲哀に満ちた曲をベートーヴェンが作曲しなければならなかったのか、理解できずに長く苦しみました。しかし、何度も何度も、涙を流しながら、聴きこんでいるうちに、その悲哀が、チャイコフスキーの交響曲「悲愴」やブラームスの交響曲第3・4番の奏でる悲哀とは異なり、世の中に絶望するのではなく、世の中の苦悩や無常から逃げないで、苦悩も無常もそのままに受け容れて肯定する、大きな平安に満ちた悲哀であることが得心されました。結果的にベートーヴェンがいっそう好きになりました。

そのようにして得心した背景には、高校に京大出身の先生がいて、京都学派の話をしてくださり、その代表格の西田幾多郎の『善の研究』の読書を薦められ、『西田幾多郎全集』をひもとき、西田哲学にある万物の存在を嘉する仏教的世界観を身につけたからだと思います。日本仏教の根幹には草木国土悉皆成仏という思想があります。仏教と無関係のスピノザ『エチカ』やゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』にも同じ思想を感じました。吉川英治『新・平家物語』やトルストイ『アンナ・カレーニナ』に惹かれたのも、特定の人物が主人公ではなく、登場するどの人物も分け隔てなく肯定されているからだと思います。

いわゆる汎神論的な思想に深く共鳴するのは、単なる個人の嗜好なのか、日本古来の自然信仰の反映なのか、改めて関心を持っています。それは読書によって勉強するべきことですが、関心の原点がベートーヴェンの音楽であったことは、わが心の遍歴を顧みて疑いありません。



デザイン学部 生産造形学科 学科長  
坂本鐵司  
Tetsuji Sakamoto

#### 文中に登場した図書

猪狩又蔵編纂  
『倫理御進講草案』  
155/Su48

柳田謙十郎著  
『新哲学読本』  
100/Y53

柳田謙十郎著  
『観念論と唯物論』  
(柳田謙十郎著作集第2巻)  
121.6/Y53/2

柳田謙十郎著  
『弁証法的唯物論』  
(柳田謙十郎著作集第4巻)  
121.6/Y53/4

柳田謙十郎著  
『宗教論』  
(柳田謙十郎著作集第7巻)  
121.6/Y53/7

カンディンスキー著 (西田秀穂訳)  
『点・線・面  
～抽象芸術の基礎～』  
708/Ka51/2

カンディンスキー著 (西田秀穂訳)  
『抽象芸術論  
～芸術における精神的なもの～』  
708/Ka51/1

S・ゴールドスミス著  
“Designing for the Disabled”  
525.1/G61

## 本との出会い・その情景

妻との本棚領有権争いが度々生ずる。負ければその本は紐でくられ捨てられる。そこで彼女の所有する怪しげなタイトルの推理小説群を指して「処分すべきだ……」と言えば、日頃からはおよそ想像できない記憶力をもって内容を解説し、本棚の領有を主張する。立場が逆の場合はどうかといえば、同じ土俵では勝ち目がない故、もっぱら本との出会いの情景を切々と語ることで抵抗するようにしている。

大学の南西角地に“専売局跡地”なる木碑がある。専売局はいつまであったのか定かでないが、SUACが建設されるまで跡地には私の母校、浜松市立東小学校が建っていた。“薨は赤く”と校歌にもあるように、塩瓦の明るい屋根は他校と比べモダンで誇りに思ったものである。現在の“出会いの広場”東端あたりに当時の図書室があり、そこに定時制(夜間)高校に通う清廉な女性が事務をしていた。ある時、彼女が本を読む姿を見てそれが何であるのか気になり、机から離れるのを見計らいそっと探ってみた。本の背表紙には金色のいかめしい書名が記され、表紙を開くと長いあごひげを蓄えた老人(杉浦重綱)の写真が貼付されていた。これが所謂「本」というもの、そして本との出会いを意識した最初であろう。3年後、高校の図書館で再会した『倫理御進講草案』は昭和天皇の幼学期6年間における教科書の草案で、第一章「3種の神器」から始まり「日章旗(日の丸)」、「富士山」、「国」、「刀」、と続く。“天皇陛下の教科書”とはどんなものか?と興味本位で読んだにすぎないが45年を経た今でも心の深層に影響が残っていることに気がつき、その力に愕然とすることがある。

同じ頃、高校の読書会で『新哲学読本』と出会った。西日の差し込む教室での指導教員は、額の汗をぬぐいながら顎を突き出すようにして熱く語っていた。当時、“哲学”というものに触れること自体で充足感を得ていたのだが、漠然としながらも人生の行動指針となるものを得たいという渴望もあった。それまでに触れた哲学の概論が“見えざるものを見る”というような神秘・深遠をつかむようなものであったのに対し、著者柳田謙十郎との時空を経た対話では、“何をなすべきか”はっきりとした方向性を見出したように感じたものである。「創造とは破壊することなり……」「否定の否定……」「一粒の麦、地に落ちて死なずばもとのままにてあらん。死して多くの実を結ぶべし……」などの言葉にしびれ、同じ著者の『観念論と唯物論』はじめ『弁証法的唯物論』『宗教論』などを英語や数学の授業中に教師の目を盗んで読みふけたことも思い出での情景である。

大学卒業後の進路についての迷いを払拭し、デザインの道に進む志を決めたきっかけとなる本がある。4年の秋、指導教員からその本を薦められたのは印刷工房。インクで汚れた机上の白い本の背表紙“Kandinsky”は鮮明だった。カンディンスキー著『点・線・面—抽象芸術の基礎』と『抽象芸術論—芸術における精神的なもの』いずれも訳本で抽象絵画を説いているが、私は疑いなくこれを“デザイン書”として読んだ。前者は様々な抽象的・幾何学的な図形を用いて形態の分析をしつつ広く一般的な造形論に及ぶ。一方、後者は抽象絵画を中心にその成立と存在根拠等と共に、色彩の分析が説かれている。私は書名を「点・線・面—デザインの基礎」また「抽象芸術論—デザインにおける精神的なもの」と読み替え、現在も座右の書としている。

興味のあることには熱中したものの、とにかく青春・青年時代は“勉強嫌い”で過ごし、それでも大学は単位取得ギリギリの状態で卒業できた。就職した企業でも“劣等生”を自覚する中、業務で訪れた身体障害者施設の所長より“読め”と強引に手渡された厚さ5センチ程の本は“Designing for the Disabled”。当時はバリアフリーやユニバーサルデザインの理念・言葉は未だ存在せず、身体に障害を持つ人たちの生活環境と対応方法について論理的に、淡々と解説された本に接することで自分なりの“ものづくり・デザイン”の原点を定めることができたと言える。その後、本の内容に関する研究をし、著者のS・ゴールドスミス氏と語り合い、それが温水洗浄便座をはじめとする各種のユニバーサルデザインなる製品・他を生むきっかけとなった。怖い施設長との出会いも人生の転機と言えるが、それより“恐るべし、本との出会い”である。



## 聞蔵（きくぞう）Ⅱビジュアル:朝日新聞全文記事オンラインデータベース編

### 「聞蔵（きくぞう）Ⅱビジュアル」とは？

朝日新聞の朝夕刊・地域面をはじめ、AERA、週刊朝日、知恵蔵および人物データベースを収録したオンラインデータベースで、収録記事数は約740万件（2007年2月現在）にのびります。

1985年以降については記事検索が可能のほか、関連キーワード参照機能、記事種別・ジャンル別の分類機能も搭載しています。情報収集や情報調査のツールとして、積極的に活用してください。

図書館・情報センターが所蔵する朝日新聞の原紙保存年限は3か年です。なお『朝日新聞縮刷版』（1945～46年、1969年～最新刊）は図書館・情報センター1階の電動書架に所蔵しています。

※聞蔵Ⅱビジュアルは学内限定のデータベースで、学内であればどこからでも利用できます。ただし、一度に接続できるのは1名のみです。

接続できない場合は他の人が使用中ですので、しばらく時間をおいてから再接続してください。



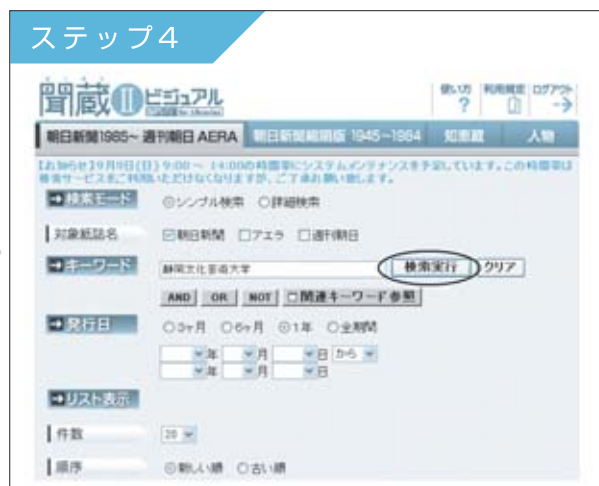
図書館・情報センターのホームページにある「オンラインデータベース」をクリックします。



オンラインデータベースから「聞蔵Ⅱビジュアル」をクリックします。



「Login to 聞蔵Ⅱ」のボタンをクリックします。



メイン画面が表示されます。ここでは「シンプル検索」の一例として、キーワードに「静岡文化芸術大学」と入力し、過去1年分の朝日新聞の記事を検索してみましょう。

## ステップ5

検索結果が表示されます。この中から、2番目の記事を見てみましょう。

No.	発行日	朝夕刊	面名	ページ	文字数	写真図表	関連素材
000001	2007年8月6日	朝刊	静岡1地方	029	01649文字	あり	
000002	2007年5月26日	朝刊	静岡1地方	031	00645文字	あり	
000003	2007年4月3日	朝刊	静岡	004	00311文字		
000004	2007年3月16日	朝刊	静岡全県・2地方	034	00176文字		

検索結果が表示されます。この中から、2番目の記事を見てみましょう。

## ステップ6

記事が表示されました。画面右側にある紙面イメージをクリックすると、拡大して読むことができます。

記事が表示されました。画面右側にある紙面イメージをクリックすると、拡大して読むことができます。

## 参考1 詳細検索

詳細検索の画面。検索条件を設定して検索を実行できます。

朝夕刊、検索対象紙(誌)別の検索や、本誌・地方版別、さらには発行社別といった絞り込み検索もできます。目的の記事の掲載情報が事前にわかっている場合は、詳細検索が便利です。

## 参考2 縮刷版を読むには

キーワード検索の結果。検索条件を設定して検索を実行できます。

1945年～1984年の朝日新聞は、画面上で紙面を読むことができます。発行日を指定した検索のほか、キーワード検索、検索オプションを用いた絞り込みもできます。

〈シリーズ〉 図書館・情報センターを使いこなそう！⑩

参考3 知恵蔵



現代用語を調べる際に効果的です。新聞記事等でわからない言葉があったら、調べてみましょう。

参考4 朝日新聞人物データベース



人物情報約34,500件を収録。議員や首長をはじめ、行政、財界、学界など広範な領域の人物情報を網羅しています。

図書館・情報センターの蔵書数および利用状況

(各年度末現在)

項目 / 年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
蔵書冊数 (冊)	116,251	126,038	139,995	151,574	160,912	171,076	179,896
うち和書	100,382	108,415	120,106	129,914	137,239	145,783	153,011
うち洋書	13,360	14,027	15,743	17,091	18,730	20,085	21,349
うち視聴覚	3,195	3,596	4,146	4,569	4,943	5,208	5,536
所蔵雑誌タイトル数 (種)	1,931	2,640	2,800	2,855	2,980	3,064	3,130
うち和雑誌	1,684	2,292	2,420	2,466	2,587	2,645	2,698
うち洋雑誌	247	348	380	389	393	419	432
年間受入冊数 (冊)	91,349	9,101	14,101	11,579	9,350	10,164	8,820
うち和書	78,978	8,033	11,855	9,808	7,142	8,544	7,228
うち洋書	11,487	667	1,724	1,348	1,800	1,355	1,264
うち視聴覚	884	401	522	423	408	265	328

項目 / 年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
入館者数 (人)	51,804	89,424	111,230	137,545	133,733	126,125	118,073
うち学生	44,542	77,304	100,395	125,698	120,896	115,283	107,466
うち教職員	3,631	4,656	5,395	5,538	6,568	5,806	5,882
うち学外者	3,631	7,464	5,440	6,312	6,269	4,982	4,725
1日平均入館者数	224	322	402	486	466	440	425
館外貸出冊数 (冊)	7,119	14,880	28,896	34,399	33,789	35,496	32,593
うち学生貸出	4,174	12,814	21,644	28,001	26,862	27,791	25,755
うち教職員	2,945	1,534	5,193	4,001	4,337	5,215	4,935
うち学外者	0	532	2,059	2,397	2,590	2,490	1,903
1人当たり学生貸出冊数	11	18	21	20	18	18	17

項目 / 年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
学外登録者数 (人)	693	785	625	996	827	812	677
開館日数 (日)	231	278	277	283	287	287	278